

在宅看護論

【在宅看護論の考え方】

「在宅看護論」が統合分野として位置づけられたのは、人々の日常の生活の意義や価値観に気づき、人間としての存在や生活の奥深さを理解し、自己決定に基づく療養生活を考えていくという看護独自の判断能力が最も問われ実践していく必要があるためと考えられる。

在宅看護は疾病や障害の予防活動や生活支援活動を含んだ地域での多領域、広範囲にわたって提供される看護である。すべての年齢が対象であり、本人・家族のライフサイクルをふまえた支援が必要になる。また、あらゆる健康水準にある人、そして看取りのケアを含めた終末期の対象に対しても質の高い看護活動が必要となる。また、臨床から在宅療養生活への円滑な移行のために、ケアマネジメントや継続看護が重要になっている。

以上の在宅看護を理解し、実践するためには、生活の場における在宅看護をイメージ化し、既存の学習と関連させながら主体的に学習ができるように構築する。

「在宅看護概論」では、在宅看護が必要とされる背景と基本理念を学び、在宅看護の対象である療養者と家族について理解を深め、特に在宅療養生活を支える家族の機能についても学習する。また、在宅療養者に必要な継続看護・訪問看護の概要についても教授する。

在宅看護援助論Ⅰ「在宅看護の基礎と地域ケアシステム」では、在宅看護の主要な柱である訪問看護の実際について学び、在宅で実際に行われる基本的な援助を理解する。その中で、実習において実際に行っている援助の中から、演習を行っていく。また地域の中で在宅療養者が生活を送り続けるため、ケアマネジメントの基本についても学んでいく。

在宅看護援助論Ⅱ「在宅療養者の看護の実際」では、在宅生活を支える制度を学び、在宅生活をイメージ化しやすいように、医療処置技術を学習し、状態別の対象に対して医療・看護やさまざまな社会資源の提供を受けながら、療養生活を続けていることを教授する。

在宅看護援助論Ⅲでは、「在宅看護過程の展開」の中で、在宅療養者と家族の価値観、人生観、自己決定、家族介護力、社会資源の活用に着目した看護展開ができるように指導する。終末期の事例に対してグループワークを取り入れながら学生が主体的に考える機会を多く設定する。在宅看護は、生活の場に一人で訪問するため、確かな知識・判断力・予測力とともに看護者の主体性が求められる。そのために実際の訪問看護計画を立案し、実践に近づけるように実施していく。

「在宅看護論実習」では、訪問看護ステーションで実習を展開し、看護の場の多様性と継続性を学び、在宅療養生活に対しての看護の機能と役割を理解していく。また、実際に疾病や障害があり外来診療を継続しながら在宅生活している意味から看護者としてどのようにかかわっていくのかということを実際に学習していく。

【目的】

地域で生活しながら療養する人々、あるいは障害をもちながら生活する人々と家族を理解し、在宅療養における看護の基本を学ぶ。

【目標】

1. 在宅看護の概念と変遷について理解できる。
2. 在宅看護の対象について理解できる。
3. 在宅看護の特徴をふまえ、在宅で療養する対象の療養状態に応じた看護が理解できる。
4. 在宅療養を支える制度の活用および他職種との連携が理解できる。
5. 在宅看護における看護の展開方法が理解できる

【構成及び計画】 [講義]

科目	授業科目	単位数 (時間数)	時 期		
			1 年	2 年	3 年
在宅看護概論		1(15)		1(15)	
在宅看護援助論Ⅰ	在宅看護と地域ケアシステム	1(30)		1(30)	
在宅看護援助論Ⅱ	在宅療養者の看護の実際	1(15)			1(15)
在宅看護援助論Ⅲ	在宅看護過程	1(15)			1(15)
合計		4(75)		2(45)	2(30)